

Concerts

● 2019年10月5日(土) 『3つの楽器を巡る楽器物語』第1章「ショパンとプレイエル」

【曲 目】ショパン：24の前奏曲 op.28 ほか

【会 場】京都コンサートホール アンサンブルホール ムラタ

【チケット】全席指定 一般 ¥3,000 / U-30 券 ¥1,500 (限定 50 枚)
会員 ¥2,700

【発 売 日】会員先行販売 5 月 11 日 (土) 一般販売開始 5 月 19 日 (日)
<https://www.kyotoconserthall.org/ticket/>

● 2019年10月18日(金) コンチェルト with 古楽オーケストラ La Musica Collana

【曲 目】モーツァルト：ピアノ協奏曲 第 14 番 K.449 ほか

【会 場】五反田文化センター

【チケット】全席自由 ¥4,000 (前売券)

【ご 予 約】narufortepiano@gmail.com

● 2019年12月19日(木)11:30～ 浜離宮ランチタイムコンサート(主催:朝日新聞社)

【曲 目】ショパンの作品を予定

【会 場】浜離宮朝日ホール

【チケット】7 月 9 日 (木) 午前 10 時より一般販売開始

● 2020年3月27日(金) 紀尾井 明日への扉

【曲 目】ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第 30 番ハ長調 Op.109
ショパン：3つの夜想曲 Op.9

ショパン：ピアノ・ソナタ第 1 番ハ短調 Op.4 ほか

【会 場】紀尾井ホール

【チケット】11 月

川口 成彦 フォルテピアノ・リサイタル

— 19 世紀 ベーゼンドルファーの修復を記念して —



使用楽器: ベーゼンドルファー(1800年代)

会場: 日本キリスト教団 千葉教会

2019年5月28日(火) 18:00開場 18:30開演

協 力: 日本キリスト教団 千葉教会
ナトリピアノ社、ピアノ工房クラング
後 援: (公財) 千葉県文化振興財団
(公財) 千葉市文化振興財団
楽器提供: 小林 定喜
主 催: 伸和ピアノ株式会社



Profile

川口 成彦 Naruhiko Kawaguchi



1989年に、岩手県盛岡市で生まれ、横浜市で育つ。
第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール第2位(2018年)、
ブルージュ国際古楽コンクール・フォルテピアノ部門最高位(2016)、
第1回ローマ・フォルテピアノ国際コンクール優勝(2013)。

フィレンツェ五月音楽祭、モンテヴェルディ音楽祭(クレモナ)、ユトレヒト古楽音楽祭、
ゴルドベルグ音楽祭(グダニスク)等、欧州の音楽祭にも出演を重ねる。
アムステルダム国立美術館の特別展示では、スクエアピアノによる録音が使用される。
2019年には、マスカット(オマーン)のRoyal Opera House Of Musical Artsのオープニングイベントに招かれ、王族の前で演奏を行う。

協奏曲では、18世紀オーケストラなどと共演。
また、モダンピアノにおいては、2016年にアメリカにてニコラス・ダニエル(オーボエ)とサクストン・ローズ(バソン)と共に、ブーランクの『オーボエ、バソンとピアノのための三重奏曲』の最終稿の世界初演を行っている。

ピアノ連弾では、小林道夫、アレクセイ・リュビモフなどと共演。
昨年(2018年)は、ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団のメンバーと共に、室内楽形式によるピアノ協奏曲のリサイタルをオランダにて開催した。

東京藝術大学大学院およびアムステルダム音楽院の古楽科修士課程を首席修了。
フォルテピアノを小倉貴久子、リチャード・エガーの各氏に師事。

ソロCDは、ドゥシークの作品集(BRILLIANT CLASSICS)、シュューベルトの作品集(Fuga Libera、レコード芸術特選盤)が発売中。
そして、2018年には自主レーベル MUSIS を立ち上げ、記念すべき第一弾としてバルトークの、『2台のピアノと打楽器のためのソナタ』をアナログレコードでリリースする。

また、スペイン音楽をこよなく愛し、2019年には、CD『ゴヤの生きたスペインより』を発表する。
アムステルダム在住。



Program

ショパン：ポロネーズ 変ロ長調 op. 71-2
2つのワルツ op. 69
ボレロ ハ長調 op. 19
前奏曲 嬰ハ短調 op. 45
バラード 第3番 変イ長調 op. 47

休憩

滝 廉太郎：2つのピアノ曲（メヌエット、憾）

クルピンスキ：ポロネーズ ニ短調

ショパン：ピアノソナタ 第2番 変ロ短調op. 35「葬送」



Prelude

※リサイタルの演奏曲順とは異なります。

本日は、新しく修復された、“貴重な19世紀のペーゼンドルファーのお披露目”という大切な公演で演奏をさせて頂けること。とても嬉しく思います。

今日は、ショパン(1810-1849)の作品の他に、日本とポーランド国交100周年に因みまして、日本の西洋音楽黎明期を代表する、瀧廉太郎(1879-1903)のピアノ曲と、ポーランドの鍵盤音楽史において重要な、クルピンスキ(1785-1857)の作品を演奏致します。

今日演奏する、クルピンスキの《ポロネーズ ニ短調》は、1820年頃の作品ですが、ショパンの最初期のポロネーズにも類似しており、ショパンが、先代の作曲家からの影響をはっきりと受けていることを感じさせます。

さて、《荒城の月》などで知られる瀧ですが、彼は、日本人で初めてピアノ曲を作品として残した人物としても知られ、それが1900年に書かれた《メヌエット》です。

彼は、1901年に日本人音楽家として2人目となるヨーロッパ留学生となり、ライプツィヒに渡りますが、なんと、5ヶ月しないうちに肺結核が発症し、帰国を余儀無くされます。

そして、死の4ヶ月前に作られたのが《憾(うらみ)》でした。才能豊かだった彼の、“ただただ無念でやりきれない気持ち”に胸が苦しくなります。

ショパンは、1830年秋。20歳の頃に祖国ポーランドを離れ、その後、生涯一度もその地に帰ることはありませんでした。

10代で既に、「ワルシャワで最高のピアニスト」とも称されたショパンの天才ぶりは、彼の初期作品を見ても明らかです。18歳の時に書かれた《ポロネーズ 変ロ短調 op. 71-2》の中に内在する優美さからも、もう既に、ショパンがショパンたることが明らかです。また、死後に出版された《2つのワルツ op. 69》の2曲目であるロ短調のワルツは、19歳の時に書かれたもので、若きショパンの哀愁の旋律です。

さて、ポーランドを離れたショパンは、音楽家としての更なる飛躍を求めてウィーンに行きますが、ウィーンではチャンスを掴むことが出来ず、丸一年と経たない内に拠点をパリに移しました。

パリにおいては、社交場であるサロンで広く知られることが、若い芸術家の出世において非常に重要でしたが、ショパンは、パリのサロンですぐに名の知られた存在となり、芸術家としての階段を登っていきます。

ショパンの作品は、「非常にシリアスなもの」と「サロンなどのために書かれた気軽なもの」、「エンターテインメント要素のあるもの」と多様です。サロンにおいて華々しく演奏されたであろう《ボレロ ハ長調 op. 19》は、当時流行していたスペイン趣味を、ショパンが作品に取り入れようとした点でも、注目すべきものです。

《2つのワルツ op. 69》の1曲目である、「別れのワルツ」とも呼ばれる変イ長調のワルツは、25歳の時に旅先のドレスデンで書かれました。そこで出会ったマリア・ヴォジンスカという女性と恋愛関係になりますが、結局恋は実らず…。そのエピソードに因んで、今日では「別れ」というニックネームが付いています。

ショパンの生涯で、最も重要な女性である作家のジョルジュ・サンド(1804-1876)。彼女との交際は1838年に始まり、同年のマヨルカ島への逃避行から親密さを増していきました(マヨルカ島にて、ショパンは結核の診断を受けます)。その後、1839年からは毎夏、サンドの別荘があるノアンで2人は過ごすようになり、2人が別れるまでの7回の夏のノアンでは、沢山の傑作が生まれました。《前奏曲 嬰ハ短調 op. 45》や《バラード 第3番 op. 47》は、1841年のノアンで完成しました。

そして、このノアン1年目に完成した大作が、《ピアノソナタ第2番「葬送」変ロ短調 op. 35》です。第3楽章の「葬送行進曲」は、先立って1837年に作曲されており、この楽章を中心にシューマンが述べたように、「乱暴な4人の子供が無理やりソナタの名でくりつけ」られています。これは、ショパンに対する批判ではなく、古典的なソナタのあり方にとらわれない、独創性への絶賛でした。特に、行進曲の後の謎めいた第4楽章からは、ショパンの芸術に対する「創造欲」のようなものを感じます。

川口 成彦